

春の夜の夢のごとし

嗟訪 匝探

合戦のはなし

陽春の季節にふさわしい話とはいえませんが、「合戦のはなし」をしましょう。

「乱」は国内で行われた内戦をいい、「合戦」は一つの場所で短期間に行われた争いのこととされています。

市内の歴史をたどると、市域での合戦は、野手地区の「龍威

院(りゅううぞういん)」とかつて存在したという「惠光院(けいこういん)」の記録から知ることが出来ます。

1490年(延徳2年)正月14日から3月10日まで「小笹合戦」があり、小笹とは現在の共興地区東小笹、西小笹のあたりになります。前年に「太田(旭

市)合戦」があり、1493年(明応2年)8月26日には野手合戦」があったと記録されています。

これらの合戦は、どのようなものだったのでしょうか。記録といっても、合戦記」や「軍記物」などが伝えられているのではなく、2つともこの戦いで死者を供養するため「過去帳」に書かれたものでした。

この時期に九十九里海岸で合戦が続いたのは戦国時代の武将・足利氏が房州安房の里見氏と結び、下総地方に進出する

ために里見氏の水軍(海賊)が暴れまわったのだらう、とする説があります。

これから50年ほど経た1547年(天文16年)にこの地域を再び恐怖に陥れた合戦が起きました。6月18日の太田合戦で500余人が討ち死にし、3日後の21日には「八日市場」において福岡城主押田伊勢入道はじめ、800余人が討ち死に」する合戦がありました。「福岡城」とは現在の若潮町(中央区)にあった砦(とりで)です。

このころ下総国では、古河方と小弓(おゆみ)方の対立があり、領主らは混乱に巻き込まれました。野手氏も押田氏に破れ、茨城地方に逃れました。その後も里見氏とともに房総を拠点とした正木(まさき)氏が下総に攻め入り、この地を荒らししました。こうした混乱は、1590年(天正18年)の小田原(神奈川県)合戦まで続きました。

1200年代から400年間、匝瑳地方の領主たちはわずかに記録に名をとどめるのみで、墓石が残されているのは米倉(中央区)の椎名氏と円長寺に葬られた押田氏だけです。

「合戦のはなし」も戦死者供養のためのもので、「春の夜の夢のごとし」なのかも知れません。

岡八日市場図書館



円長寺(野田地区野手)にある押田氏の墓塔